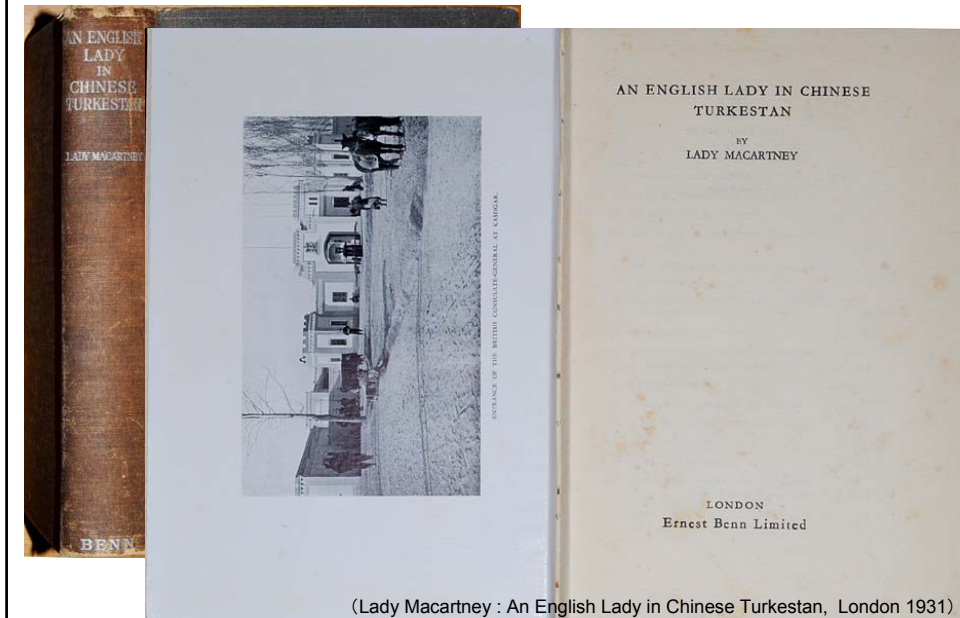


原著：「マカートニ(英国外交代表)夫人のカシュガル滞在記」




(Lady Macartney : An English Lady in Chinese Turkestan, London 1931)

金子先生翻訳：

「マカートニ(英国外交代表)夫人のカシュガル滞在記」

カシュガル滞在記


マカートニ夫人
金子民雄訳



1898～1915

別世界の風景

③

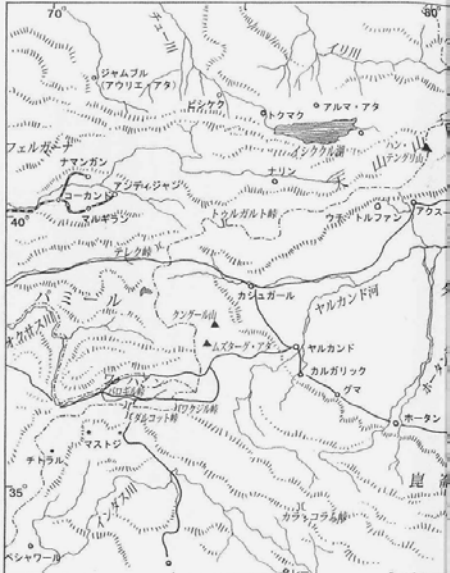


マカートニ夫人
金子民雄訳

聯合出版

一八九八年、カシュガル英国代表の夫人に嫁いで以来十七年間、中央アジアの沙漠と草原の地で現地の人々と交わり、三人の子を育てた夫人の体験記。冒険心と好奇心に富む英国女性ならではの記録。

聯合出版
定価（本体300円＋税）



「マカートニ(英国外交代表)夫人のカシュガール滞在記」目次 1

目次

訳者まえがき

第一章 ロンドンからカシュガールへ

冒險への旅立ち鉄道と馬車での蜜月旅行 一人ぼっち残されて カスピ海沿岸の風景
 アム・ダリアを渡る サマルカンド総督のはからい 今まで一番楽しい旅
 カシュガールからのお迎え アンディヤンから二輪馬車で オシの地区司令官夫人
 キヤパン出発 初めてラクダに乗る 天山山脈の峠を越える ロブ・ノールに注ぐ川
 ロシアとシナの国境 キルギス人の天幕地 長い旅の終わり

第二章 チニ・バグの第一印象

部屋からの光景 カシュガール川とパミールの峰々 私たちの住まい
 自家製の家具に囲まれて 使用人と従者たち 英国居留地の一面と庭園
 夫が飼っていた生き物

第三章 カシュガールでの最初の日々

協台の訪問 協台の夫人と各嬢の訪問 次の訪問客はインド夫人
 シナ人秘書官の奥さんの訪問 散々な目にあつたピアノ スウェーデン人の二人の夫人
 異郷の地に流れている神文

第四章 シナ・トルキスタン概観

シナ・トルキスタンとは 不毛の地に点在するオアシス 沙漠の中の居住地跡
 バウアー、スタイン、ル・コック シナ人の支配下にあるトルコ民族
 シナ人の統治とロシア 夫とヤングハズバンド大尉

第五章 カシュガールの旧市街

旧市と新市 道台と提台 イド・ガ市場の喧嘩 色鮮やかな光景
 魅力的な女性、かわい子供 帽子とターバンとベルト 女性の身だしなみ
 長い袖の使われ方 昔からの町の新しい変化 初めて町を歩いた日のこと

第六章 シナ人の晩餐会

提台からの招待状 シナの馬車に乗って 新市街に入る 提台の家 女主人の部屋
 晩餐会の始まり 忘れられない味

第七章 家事切り盛りのむすかし

コックがいなくなつて、ますパンとバター作り イースト菌を作る ミルクを確保する
 牛肉、豚肉、羊肉 安全な飲料水の確保 客人をもてなすことのむすかし
 欧風料理とお菓子の準備 思い出に残る大失敗 チベットの料理人ラソ

99

89

75

63

53

43

13

1

「マカートニ(英国外交代表)夫人のカシュガール滞在記」目次 2

第八章 最初の有給休暇

四年後の休暇 キヤパンの旅 馬車の旅 列車の旅 赤ちゃんと乳母を連れて
 ジャブアール・アリとの再会 粉米になつた紙巻タバコ 英国から届いた帽子
 衣類には要注意 カシュガール郵便事情 年間の気候 恐怖の砂嵐「プラン」
 心はずむ春の訪れ 忘れられない定景

第九章 カシュガールの女性

家庭の問題には関わらない 宴会に招かれて 愛くるしい子供たち 迷信と魔術師
 母親と赤ん坊の過酷な生活 結婚のなんという軽さ お祈りする女性たち
 気がふれた聖人 凍りつてしまった老婆

第十章 キルギス族の中の夏季休暇

ボスタン・テレックの谷へ 旅の途中の快適な一泊 回教行政長官のもてなし
 ボスタン・テレックに到着 心躍るキャンピング地生活 単純で満足のない暮らし
 キルギスの女たち 居住空間としての天幕 早駆け競技バルガイ

第十一章 ナリン経由で一時的帰国の途に

カシュガールとの別れ 峠への道 天山山脈の山頂を見ながら 大部分水溜トルガルト峠
 天に近い湖 草花の牧草地を歩く 生きた心地のしない渡河体験 ナリンで英気を養う

第十二章 シナの革命

一九二二年五月の騒動 運命の火曜日 九死に一生を得た役人一家 生き残つた協台
 暴徒の侵入に備えて 砂嵐が示した神の意思 夫と子供たち 難民とともに
 ロシア連隊の到着 城内に取り残されたコサック兵 一触即発の息詰まる夜
 ロシア軍隊の引き揚げる

第十三章 カシュガールの変化

新しい英国総領事館 ロシア婦人の流儀 ロシア人のパーティーで テニスクラブの付き合
 ヨーロッパからの来訪者 カフォルム峠を越えてきた女性 変化への興味とまどい
 ハレー菓屋と日食・月食

第十四章 さようならカシュガール

一九二四年、ドイツとの戦争 サイクス准将の赴任 テレック峠を越えて
 凍りついた馬を見る アンディヤンから汽車で 厳しい荷物検査 千の湖の国
 白夜の中を走る 機雷の北海を抜く故国へ

229

213

197

167

151

135

117